苅田港新松山地区で

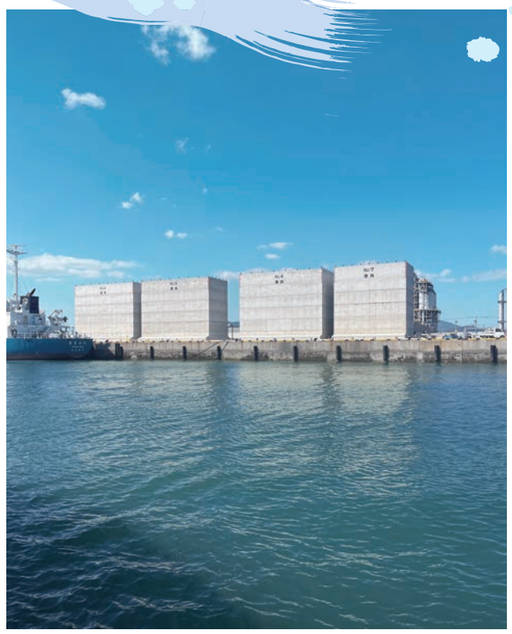
うみの現場見学会 開催

学生ら 15 人が参加！　海上工事の魅力を感じる機会に

日本埋立浚渫協会は2 月 17 日、第 30回「うみの現場見学会」を福岡県苅田町の苅田港新松山地区で開きました。地元の大学で学ぶ工学系の学生 14 人と教員 1 人を招き、浚渫作業中の現場と据え付け予定のケーソンを案内。海上工事の魅力やスケールの大きさ、施工を支える高度な技術、担い手の役割などを知ってもらう機会としました。学生にとっては講義で味わえない貴重な体験となり、船上からの現場見学に目を輝かせていました。

苅田港は防災拠点（防災拠点港）に指定され、新松山地区、松山地区、本港地区、南港地区の 4 地区で構成されています。周辺には自動車工場やセメント会社の工場などが多く、現在は工業生産品の積み出しの役割を担っています。

今回、見学会を開催したのは、国土交通省九州地方整備局が発注し、五洋建設が施工する「令和 6 年度苅田港（新松山地区）岸壁（−12m）築造工事」（工期 2024 年 8 月 6 日～ 25 年 7 月 31 日）の現場です。バイオマス発電の燃料などを取り扱う岸壁を整備するためのケーソン据え付け工事になります。雑石撤去やグラブ床掘、捨石ならし、ケーソン据え付けなどを進めます。



据付を控えたケーソン

見学会に先立ち、現場の説明を九州地方整備局苅田港湾事務所で実施しました。日本埋立浚渫協会の山下朋之企画広報委員長は「普段の生活で目にする機会の少ない海上工事を近くから見学いただくことで、海に囲まれた日本での港湾・空港などのインフラ整備の重要性と、それを支える海洋土木技術、建設産業に従事する技術者、技能者について広く理解してもらいたいです」と述べました。続いて、苅田港湾事務所の高山優所長が苅田港で行う事業の概要などを説明しました。

現場にはグラブ浚渫船も

苅田港湾事務所で事前説明を聞いた

その後、学生らは普段工事に使われている交通船に乗り込んで、海の現場の様子を見学しました。船上で現場責任者の話を聞きながら、据付予定のケーソンを間近で臨んだほか、グラブ浚渫船による作業状況など、海上ならではの工事の一端に触れました。

見学後、工事関係者との質疑応答が行われ、学生や教員から「陸上土木と海洋土木の課題は同じですか」「海上事業のトレンドや業務の変化を教えてください」「今後どのような工事が行われるのですか」「作業船をどのくらい保有しているのですか」といった幅広い質問が投げ掛けられ、海上工事への関心が高まったことがうかがえました。

船上から工事の様子を見学